

日本本土の一般的な農村の子ども達が体験した太平洋戦争。 戦場にならなくても子ども達は戦っていた。



瀬田国民学校五年智組集合写真

太平洋戦争は、一見平和な農村でも、その生活や教育に大きな影響をあたえました。

それは、大きな惨禍に見舞われた沖縄、広島、長崎、あるいは東京、大阪などとは違いますが、日本中あちこちで経験した「どこにでもあった戦争」です。

滋賀県瀬田国民学校の子ども達が、1944（昭和19）年4月～1945（昭和20）年3月までの日々を記録した日誌は、そうした記憶をよみがえらせます。

九月十八日
大東亜戦争もますますはげしくなってきました。
私たちが一機でも多く、一船でも多く送って、この戦争に勝ち抜かなければなりません。



七月六日
こうして、戦争も一日一日と激しくなってきたので、瀬田町からも、このとおりたくさん（戦争に）行かれます。
それで、かそくの家や、国のために戦死して下さったお家へ、お手伝いに行ってきたと思います。



十月十二日
きのうは沖繩・宮古島に、敵機が四百機も来しました。
戦は一日一日とはげしくなって、決戦の月だそうです。
私たちがすこしもひまなく仕事にはげみ戦に一日も早く勝ち抜かなければなりません。



十二月十八日
お昼になると警戒警報が発れいされたのでうちへかえった。
すぐ空襲警報が入った。
九機の真っ白な飛行機がゆうゆうと飛んでいきました。それは敵機だったそうです。



写真・絵日誌：滋賀県大津市歴史博物館所蔵

学級日誌の複製展示のほか、日誌が描かれた頃の沖縄の様子や沖縄戦に参加した滋賀県出身者に関する展示も行います。